

# 現代から見た道徳

清水 幾太郎

司会の方のお話によりますと、何回も講演の御依頼を受けた後に、漸く私が腰を上げて、参上することになったということでございます。なるほど、よく考えてみると、そういう次第になるのかと思いますが、モラロジー研究所の方は、私の研究室へいらっしゃいまして、講演のことに触れられまして、非常に控え目にお話しになるのであります。それがモラロジーの奥床しい精神から来ているのでしょうけれども、本当に講演を依頼されたのか依頼されなかったのか(笑)、それが曖昧なままに、お帰りになるということが二度ばかりございました。もっと早く、もっと明確に、「講演を頼みます」とおっしゃられたら、「よござんす」と私はお引き受けしたのだと思います。私の講演が延引して、今日に至りましたことは、私の勘の悪さにも責任がありましょうが、モラロジー研究所の方々の表現が明確でなかった点にも責任があるかと思えます。「表現されないものは、存在しない」というのが私のモットーでありまして、この点は、恐らく、私の講演の最後の部

分で触れることになろうかと存じます。

なお、本日の講演の題目は、「現代から見た道徳」となっておりますが、私の記憶では、「道徳から見た現代」であったのではないかと思うのであります。(笑) まあ、どちらでもよいでしょう。——今日は、私が平素から考えております事柄を幾つか申し述べたいと思います。

## —

ケインズというイギリスの経済学者の名前は、どなたも御存じのことと思います。数年前までは、ケインズと言えば泣く子も黙るという勢でございましたが、近年、このケインズの権威、聊かと申しますより、<sup>傾</sup>にと申すべきでしょう、大いに低下致しまして、「ケインズ批判」とか、「ケインズ時代の終焉」とか、そういうことが盛んに言われております。その点は姑く<sup>シバ</sup>措いて、やはり、ケインズという経済学者は、大変に偉い人であったと思います。

ケインズの著者は、御存じの通り、『雇用、利子、貨幣の一般理論』でございまして、それが出版されましたのが1936年(昭和11年)でございまして。この昭和11年という年は、日本では二・二六事件の年として記憶されております。

みなさんは、私がケインズの話から始めましたのを多少奇異にお感じになっているかも知れません。しかし、ケインズは、「経済学は、モラル・サイエンスである、道徳科学である」とハッキリ述べているのであります。モロジー研究所の方々と深い縁があるのではないのでしょうか。

彼は、一部の経済学者のように、経済学を自然科学と見る考え方を根本的に否定しているのであります。また、ケインズは、「モラル」とは、「現実へのコミットメント」である、進んで現実の問題の解決に責任を負うことである、と述べているのであります。そういう意味で、ケインズは、「私は歯医者である」とも言っております。現実には歯が痛んで困っている人々がいるから、その治療をする、それが自分の仕事だという意味であります。

私は、ケインズの著書が出版されます五年前の1931年(昭和6年)に東京

帝国大学を卒業致しました。当時は、到底、今日からは想像することの出来ないような大量失業、深刻な不景気の時代でございました。私は、その時代の辛さを骨身にしみて味わって参りました。こういう大量失業、深刻な不景気で、飢餓状態になって行けば、食うためには娘も売る、一家心中も起るわけで、それが大きな暗い背景になって、二・二六事件が起ったと見るべきであります。部下の兵隊が、その実家の、その生家の生活の苦しさに泣いているという状態では、これらの兵隊を指揮し統率する立場にいる小隊長や中隊長としては、政治に関与しないというのが義務であっても、社会及び政治に無関心ではいられなくなる。当然のことであります。兵士が安んじて軍務に服し、国のために殉じ得るような日本を作らなければ、という気持が青年将校たちを捕えたのは自然の理であります。

しかし、深刻な不況、大量失業は、日本だけの現象ではなく、世界的な規模のものでございまして、そこから、各国に多くの大事件が発生致しましたが、只今は立ち入りません。とにかく、この深刻な不況、大量失業という問題——これは歯が痛いところの騒ぎではありません——を解決するための理論的な処方箋を書いたのが、二・二六事件の年に出版されたケインズの書物なのでございます。

実を申しますと、深刻な不況とか大量失業とかいう問題は、ケインズ以前の正統派経済学——マルクスの経済学は少し違いますが——では存在しない筈のもの、考えられない事柄であったのであります。伝統的な経済学の常識から申せば、供給があれば需要が生ずることになっておりました。労働の供給があれば、その価格は低くなるであろうが、やがて労働に対する需要が生ずることになっていて、長期に亙る大量失業という現象は発生するわけがなかったのであります。ところが、現実には、そうは参りませんで、労働の供給ばかりが膨れ上って、しかも、それに見合う需要が生れて来ない、そういう事態が生じて来たのであります。そして、ケインズという「歯医者」、ケインズという「モラル・サイエンティスト」は、この事態の打開のための理論を作り出したのであります。念のために申し添えますと、この1936年という

年は、ケインズが、大量失業、深刻な不況という問題を解決するための理論的及び政策的な処方箋を提示した年でございますが、この年、二・二六事件と同じように評判の悪いヒトラーという人物は、ドイツで現実——理論でなく——完全雇用を達成しているのです。戦後、ヒトラーは大悪人ということになっておりますけれども、食うためには娘も売るといふ飢餓の時代では、救ってくれるのなら、ヒトラーでもよい、スターリンでもよい、戦争でもよいというのが、多くの人々の真実の気持だったのです。どうも、戦後に書かれた歴史の本は、こういう現実の苦いところ、濁ったところを綺麗に切り捨てて、床屋から出て来たばかりの頭のように浅薄且つ不自然に思われます。

さて、ケインズの『雇用、利子、貨幣の一般理論』は、複雑且つ難解な書物でございます。しかし、この複雑で難解な書物を支えている二本の柱がございまして、一本の柱は、「消費関数」、もう一本の柱は、「流動性選好」というものでございます。いいえ、二本とも、そう特別のものではございません。第一の「消費関数」というのは、人間は、所得が増えれば消費も増える、しかし、所得が増えるほどには消費は増えないということでもあります。消費に廻らないで、貯蓄される金額が増えることとなります。第二の「流動性選好」であります。流動性というのは現金或いは直ぐ現金になるものことで、要するに、人間は現金が好きだということでもあります。(笑) 何より好きなのかと申しますと、株券などより好きだということでもあります。利率などから申せば、株券の方が得なのでしょうけれども、現金の方が好きで、それを銀行に貯金する。美空ひばりは、床下に穴を掘って、何千万円だか何億円だかを埋めていたという話がありました。あれは、女中が盗んで、それで初めて世に知られたことではありますが、「流動性選好」は、天下の大歌手から私どもに至るまで、すべての人間が持っている一つの傾向でございます。話が少し安っぽくなってしまったように思いますが、右の二者がケインズの革命的な著書を支える二本の柱でございます。

言い換えますと、人間というものは、「過剰貯蓄」へ進む傾向があるとい

うこととなります。しかし、これは節約や儉約という名で、長い間、人間が美徳と考えて来たところのものであります。ケインズに言わせると、現在の不況は、人間の悪徳によって生じたものではなく、人間の伝統的な美徳から生じたものであることとなります。それでは、如何にして、人間を伝統的な美徳から解放するかと申しますと、ケインズは、三つの対策を提出しております。第一に、利子率を低くして、民間投資を刺激すること。第二に、低消費グループ——高額所得者——から、高消費グループ——低額所得者——へ所得を移転すること。第三に、不足分があれば、これを公共投資で埋めること。この三つの対策によって、大不況、大失業という現実の問題を解決しようと考えたのであります。

私は経済学者ではございません。また、本日の研究会も、経済学の研究会ではございません。私がここでケインズを引き合いに出したのは、この「消費関数」とか「流動性選好」とかいうのが、人間性、人間の本性、人間というものなどと色々に訳されております Human Nature に関するケインズの洞察に発しているからでございます。私は、「洞察」という言葉を用いましたが、或る研究者は、「直覚」という表現を用いておりますし、更に、別の研究者は、「勘」とか「思いつき」とかいう言葉を使っております。精密な理論体系も、その根本を支えているものは、ケインズが人間というものかどうか見ていたか、その人間観なのであります。もっとも、ケインズ自身は、「これは一個の心理学的法則である」と申しておりますが、「心理学的法則」というほどのことではなく、こういう癖、こういう傾向が人間にはあるという程度の見方であると考えます。

ケインズの書物が公にされましてから、と申しますより、実は、第二次世界大戦後になりまして、ケインズの考え方が広く採用され、経済を、ただ経済に放置しておかないで、これに国家乃至政府が或る程度まで介入して、経済の成長及び安定を図るといふ政策が各国で用いられるようになり、多くの資本主義諸国の繁栄を生んだことは、更めて申上げるまでのことでもございません。

自然科学は別でございませうけれども、みなさんの御専攻になっておられる倫理学、ケインズのような経済学、私の専攻である社会学、政治学など、結局、これらの学問の取扱います現象は、人間から生ずる現象であり、また、人間と人間との間の関係から生ずる現象でございませう。片時も、私たちは、Human Nature というもの、人間の本性というものを忘れることは出来ません。それを忘れると、学問的な体裁は整っているけれども、役に立たない、ペダンティックな遊戯のようなものに堕してしまふ。人間というものをどう見るのか、どう考えるのか、これが、一切の人文科学や社会科学の根本に大きく横たわっている、永久に横たわり続けるであろう、先ず、それを私は申し上げたかったのでございませう。

## 二

そこで、次に問題になりますのは、歴史上、どういう人たちが、この人間性というものを研究して来たかということでありませう。勿論、沢山の人が研究して参りましたが、取敢えず、三つのグループの人たちを挙げて、簡単にお話ししようと考えませう。

第一のグループ——これは、通常、モラリストと呼ばれている人たちであります。こちらのモラロジーと縁の深い言葉でございませう。しかし、御案内の通り、モラロジーという言葉は、野球の「ナイター」とか、「ニュー・フェース」とかと同じ和製英語でありませう、英和辞典には載っておりませう。今度、研究社から『新英和大辞典』の第五版が発売されましたので、昨日、念のために、「モラロジー」という言葉を探してみました、やはり、見当りませうでした。しかし、何年か時が経ち、第六版が出る頃には、「モラロジー」という言葉も入っているであろう、と私は密かに期待してございませう。

さて、モラリストと呼ぶべき人々は、古今東西、つねにございませう。西洋の古代ギリシアのソクラテスもその一人かも知れませう。平安中期の清少納言の『枕草子』なども、自然の美しさを謳っている個所と並んで、屢々人間というものについて鋭い観察を述べている個所がございませう。また、14世紀に

なりますが、吉田兼好の『徒然草』にも、人間観察の文章が含まれてございませう。

現在の日本では、山本夏彦という人が、代表的なモラリストではないでございませうか。文藝春秋という会社の『諸君ノ』という雑誌に、毎号、「笑わぬでもなし」という短い文章を寄せてございませう。もう何年になるでございませうか、山本夏彦氏は、人間及び人間現象に関して、遠慮のない、かなり意地の悪い言葉を書き続けてございませう。御愛読の方もいらっしやるでございませう。

しかし、このモラリストの本家のようにございませうするのは、何と申しませうしても、17世紀のフランスのモラリストでございませう。その人たちの作品の例を少し挙げませうと、モンテーニュの『エッセー』があります。それが完成しますのは、1588年、16世紀の末でございませう。このモンテーニュの『エッセー』に刺戟されて書かれたのが、イギリスの有名なベーコンの『エッセイズ』で、これは1625年、モンテーニュの影響がなかつたならば、ベーコンの『エッセイズ』は生れなかつたと言われてございませう。

フランスへ戻りますと、ラ・ロシュフコーの『箴言』が1665年に出てございませう。続いて、知らぬ人のいない、パスカルの『パンセ』が出てございませう。それが完成した年代は、必ずしも定かではございませうませんが、17世紀の後半でございませう。それから、ラ・ブリュイエールの『レ・カラクテール』が1688年に出てございませう。これらの書物は、殆ど全部、日本の種々の文庫本に収められてございませうから、きっと、みなさんは、既にお読みのことと存じませう。

ところが、最後に挙げませうとしたラ・ブリュイエールですが、彼は、紀元前三百年代のギリシアで出ましたテオフラストスという人の『人さまざま』（エティコイ・カラクテレス）という書物をフランス語に翻訳致しませうして、その翻訳に、17世紀のフランスの色々な人たちの姿、色々な風習に関する叙述を付け加えたもの、それが『レ・カラクテール』（人さまざま）なのでございませう。

こういう作品を読んでございませうと、自然に幾つかの特色が私どもの眼に入つて参ります。第一に、どの作品も、多くの断片から成つているということ、系統的なもの、学問の体裁を整えたものではないということでありませう。

す。山本夏彦氏の文章でも、精々、原稿用紙10枚か20枚ぐらいのものでございましょう。フランスのモラリストの作品には、一行か二行という非常に短い断片が沢山ございまして。

なぜそうなのか、私の友人に、フランスのモラリストを専門的に研究している人がおまして、この研究者のお話によりますと、17世紀のフランスでは、こういう断片的な形式が一つの流行であったそうであります。そうかも知れませんが、しかし、17世紀のフランスだけでなく、古今東西、多くの断片から成る作品ばかりであることを考えますと、私は、もう一つ、人間が矛盾に満ちたものであることも忘れてはならないと思います。御承知のように、人間の行動は、実に様々な側面がありまして、しかも、その様々な側面が相矛盾する、相容れないことが多いものでございまして。ですから、様々な側面を統一して、これを系統的に書いて行くのは困難で、あの側面、この側面を捕えて、これを断片的に書くほかはないのではないかと、いや、その方が、この人間という面倒な存在の真実に迫ることになるのではないかと。私は、そんな風に考えております。

第二に、人間が賢明であり、高貴であり、寛大であることは、私たちの美しい理想でございまして、人間を見るモラリストの眼は、理想によって曇らされていない、これが大きな特徴であると私は考えます。モラリストは、人間性については、理想派ではなく、冷静なリアリストであると申せましょう。彼らの作品を何頁でも読んで戴けば、忽ち判ることではあります、人間が如何に愚かなものであるか、如何に卑しいものであるか、如何に利己的なものであるか……謂わば、人間のマイナス面を遠慮なく描き出しております。私などは、一々思い当って、顔が赤くなります。しかも、ラ・ブリエールが紀元前三百年代のテオフラストスの書物を翻訳し、それを書き継ぐような形で、17世紀のフランスの人間の姿を描いたところからも察せられますように、また、私たちが遠い昔の日本の古典を読んでハッと思うことから察せられますように、人間のマイナス面、愚かさ、狡さ、卑しさというようなものは、何百年経っても、何千年経っても変わらないものと申さねばなりません。

倫理学も、モラロジーも、人文科学も、社会科学も、こういう万代不易の人間性を前提として考えて行かねばならないのでございましょう。

第二のグループ——それは心理学者であります。心理学の歴史を溯りましたら、アリストテレスの『デ・アニマ』が先祖ということになるかも知れませんが、今は、イギリスのヒュームを先祖の一人として考えて行くことに致します。ヒュームは、『Human Nature 論』——『人性論』などというタイトルで訳されています——を1739年から40年にかけて出版しております。岩波文庫にも入っているでしょう。この本を少し読んで行きますと、忽ち「人間の科学」(the science of Man) という言葉が出て参ります。ヒュームは、辺境の小さな城を攻めるのではなく、一国の首都を攻略するのだ、と言っております。つまり、すべての学問は人間の活動の成果である、この人間というものを研究すれば、一切の学問、自然科学を含む一切の学問の基礎が明らかになる……こう申しました。しかし、この時代は、ヒュームと限りませんが、すべての人たちが、ニュートンの打ち樹てました力学の体系を学問のモデルと考えておりました。或る意味では、これは今日でも同じでございまして、多くの経済学者、或る種の政治学者、或る種の心理学者、こういう人たちは、ニュートン力学が学問の唯一のモデルであるという考え方を抱いております。それが如何に愚劣か、如何に危険か、それを詳しく説いたのが、私の『倫理学ノート』(岩波書店、昭和47年)であります。とにかく、18世紀におけるニュートン崇拝というのは猛烈なものでございまして。ヒュームも、「人間の科学」をニュートン力学のような精密なものたらしめようと考えておりました。

けれども、力学で取扱う極めて単純な問題と、モラリストがその一面を描いておりますような複雑な人間の問題とは、これは全く違うものでございまして、そこへニュートン力学を持ち込んでも、あまり効果は生れは致しません。しかし、こういう形で近代の心理学は発足し、進歩して、今日に至っております。私は、心理学の一々の学説について何かを申し上げようとは思いませんが、先程のモラリストの人間研究と同じように、幾つかの特色がある

ことだけは、申し上げておきたいと思います。

第一に、心理学における人間研究は、科学的、客観的、組織的であろうとする態度を採って来ております。モラリストのように、人間に明らかな価値判断を加えて、これを愚かなもの、卑しいものなどと考えることは致しません。飽くまでも客観的であろうと致しております。

第二に、科学的であろうとする結果、心理学では、人間を「まるごと」掴むということが行われなくなりました。「まるごと」掴むということと、科学的であるということとは、何処かで深く食い違ひうものがございます。心理学の文献が数百頁の大冊で、第一章、第二章と整然と記述されているのに対し、また、それが人間の姿を「まるごと」示さないのに対し、モラリストの断片は、僅か一行か二行で、人間の「まるごと」の姿を見せてくれます。科学的というのは、どうしても、分析的ということになります。人間というもの进行分析して、これを究極の諸要素に分解して、これらの諸要素をもう一度結び合せて、即ち、再構成することによって人間の全体的な姿を浮び上げるといのが狙いですが、それはなかなか成功しないのでございます。

第三に、と申しますより、重複になりますが、ニュートン力学をモデルとした科学性の追求が、終始、心理学者にとっては魅力がございまして、御承知の行動主義の心理学は、その極限に近いものかと考えられます。今日でも、多くの方々が、S(刺戟)とR(反応)との関係という方式で人間の行動を理解しようと試みております。もっとも、考えてみれば、これは無理もないことでありまして、行動主義が現れます以前、19世紀から20世紀の初期に至るまで、心理学の方法は、一般的に見て、内観(内省)でございました。つまり、人間が自分の意識の状態を反省(一種の観察)するという方法で、反省して得た結果は、その人間の言葉で「報告」されることとなります。「自分は愉快である」、「自分は腹を立てている」……。長い間、心理学は、こういう方法で進んで来たのでありますが、内観には大きな泣きどころがあるのであります。内観は、それはそれで一種の観察には違いありませんけれども、観察される意識の状態というのは、その人間にしか観察されないもので、

「僕にも観察させてくれ」と他の研究者が言っても、観察させることが出来ないのであります。従って、本人の「報告」を信じるよりほかに道がない。しかし、その「報告」——これは大勢の研究者にとって共通の対象ですが——は、何処まで信用出来るものなのか。そもそも、大勢の研究者と一緒に観察することが出来ないようなものは、科学的研究の対象たる資格がないのではないか。それは、その通りだと思います。意識の状態は、文学作品の材料にはなっても、心理学の問題ではあり得ない、そう考えた人々が現れ、そこから行動主義が発端することになったのでございます。

大勢の研究者と一緒に観察することが出来る対象となりますと、人間の意識ではなく、人間の行動ということになります。そして、行動をS(刺戟)とR(反応)との関係で捕えるという方向へ人々は進んで行きました。ところが、刺戟となりますと、人間の場合、与えることの出来る刺戟は限られたものになります。あまり強烈な刺戟を与えて、人間が死んでしまったら、大問題であります。人間の脳などに手術をして、その反応を見ることなど思いも寄りません。大変な犯罪であります。そこで、S—Rになりますと、人間を相手にするのが面倒になって来ます。ネズミなら、死んでも、大したことはありません。脳の一部を切除して、反応を見ることも簡単に出来ます。こうして、研究対象が、人間の行動からネズミの行動へと移って行きました。これも一種の進歩なのでございましょう。

しかし、意地の悪いものでありまして、右のように進歩して来ますと、今度は、ネズミの行動の観察によって知り得る範囲内だけで、人間の行動を知ろうとするようになる。人情の然らしめるところ、学問の方法論上の一つの係<sup>ツネ</sup>踏でございまして、ネズミで判ることだけが人間について判るようになって参ります。「まるごと」の人間どころか、人間の一部分も研究者の視野から消えてしまいます。行動主義につきましては、また、後に申し上げます。

第三のグループ——それは啓蒙思想家であります。そして、その本場は、あのモラリストと同じく、フランス、18世紀のフランスであります。この啓蒙思想家にも独特の人間観がありまして、一口に言って、それがモラリスト

の人間観と正面から衝突している、そこから、現代の色々な問題が生じている、こう申して差支えないと思います。18世紀には、一方、前に申上げましたニュートン崇拝が進み、自然科学が発展し、それに伴って、他方、教会の権威が著しく低下して参りました。スピノザの「神即自然」という有名な言葉の意味はよく存じませんが、久しく絶対の地位にあった神の影が薄くなり、自然の観念が強大なものになりました。神が善であったように、自然(Nature)が善になりました。そうなれば、当然、人間性、人間という自然(Human Nature)も善になります。

人間の生れつきの性質或いは行動様式、これは古くから「本能」と呼ばれております。それをどう見るかについては、色々な考え方がございますが、啓蒙思想家全体を通じて、本能は悪いものであることは不可能である、という風に考えられておりました。啓蒙思想家の代表者である、ヴォルテールによれば、「人間は、動物に見ることの出来ない自然的な善意を有している。」また、啓蒙思想家の中でただ一人、フランス革命時代に生き残り、その革命の中でギロチンに送られる日を待っておりましたのがコンドルセでございましたが、彼は指輪の中に隠しておいた毒を仰いで、ギロチンへ行く前に自殺しました。そのコンドルセは、「すべての人間のうちには、正義及び善意の厳密且つ純粋な原理が含まれている」という言葉を残しております。

人間を見るモラリストの眼は、理想に曇らされないリアリストの眼であるという趣旨のことを私は前に申上げました。これに対して、人間を見る啓蒙思想家の眼は、理想に燃えているのです。彼らはアイディアリストだったのです。次にアイディアリストの人間観について若干の特色を探してみることになります。

第一に、彼らにおいては、人間一般、人類一般が問題になっております。モラリストの場合には、レ・カクテール、つまり、キャラクターズで、「人さまざま」ということになり、色々な人間、人間の色々な癖、色々なマイナスの傾向、それが問題なのですが、啓蒙思想家の場合には、人間一般、人類全体に共通のものが問題になる。また、モラリストが指摘する人間の愚

かさ、卑しさなどは、時代を越えて変化しないもの、人間の本質なのですが、啓蒙思想家には、「人類無限完成説」というのがございまして、人間は、時間の流れの中で限りなく進歩し完成して行くというのであります。

第二に、教会の考え方によれば、人間には、どうしても贖うことの出来ぬ原罪(オリジナル・シン)というものがある、アダム、イブ以来の原罪というものがある。その原罪を否定したところから、啓蒙思想においては、人間は善の結晶のようになったのであります。けれども、原罪は否定しましたが、現実の人間世界に沢山の悪徳や不幸があることは否定出来ません。それは何に由来するのか。それが人間の内部に由来することは出来ません。なぜなら、本来、人間は善の結晶なのですから。そこで、現実存在する悪徳や不幸は、人間の外部に由来することになります。つまり、人間の外部にある環境や制度に欠陥があって、そのために悪徳や不幸が生じていることとなります。従って、人間本来の善を実現し、人間の無限完成を可能にするためには、環境を改善する、制度を改革する、そういうことが必要になって来ます。裏から見れば、現実の悪に関する責任から人間を解放するわけで、人間には何の罪もないという口当りのよい、甘く訴える考え方なのであります。もう一遍、別の見方を致しますと、それは教育万能の思想で、外から良い刺戟を与えさえすれば、どんな立派な人間でも作ることが出来るというわけでありませぬ。

第三に、これは私から申上げる必要もないことでございますが、自由、平等、正義、友愛、平和……というような美しい観念——美しい言葉——は、すべて啓蒙思想から発しているものであります。換言すれば、現代の価値体系の先祖が啓蒙思想家ということになるのであります。18世紀と現在とでは、物質生活の面では大変に大きな相違があります。しかし、精神生活の面では、あまり大きな変化がないとも言えるのであります。

### 三

何時の世も同じでしょうが、現代の日本にも色々な面倒な問題があります。

それを列挙することは出来ませんが、どうも、その根本には、人間観の食い違いと申しましょうか、モラリストの描いたような人間観と、啓蒙思想家の描いたような人間観との衝突があるのではないかと、そんな気がするのをごさいます。そういう点を中心に置いて、幾つかのトピックスに触れてみることに致します。

第一——この講演の初めで、ケインズの人間観についてお話し致しました。消費関数とか、流動性選好とか、経済行動における人間性を示すものであります。しかし、ケインズの政策によれば、政府や国家が、要するに、政治というものが経済に介入することになります。そうなりますと、政治行動における人間性ということが、否応なしに、大きな問題になって来ます。ところが、政治行動における人間の本質という点で、ケインズは大きな失敗をした、彼には大きな誤解があったのであります。そこに、近年における「ケインズ時代の終焉」の原因の一部があるのではあると思います。

明治維新以来、日本は非常にモビリティの高い社会でありまして、草深い田舎の貧しい家に生れた子供でも、能力があれば、然るべき学校を卒業して、高い地位に就くことが出来ますが、ヨーロッパ諸国は、モビリティが非常に低く、「カエルの子はカエル」であります。日本のインテリと違って、ケインズのようなイギリスのインテリは、貴族的な環境で育ち、同じような人たちと交際して来たのであります。政治というものを考える時も、自分の身边にいるような品性高潔、無私無欲のエリートを土台にして人間性を考えていたのです。ところが、貴族政治ならいざ知らず、民主政治におきましては、政治家は選挙に落選したらお仕舞で、当選を目指して利己的に振舞います。投票する有権者の方も自分の利益になるように行動します。天下国家のことばかり考えていたら、政治家は落選してしまいます。言うまでもなく、経済は利己心で動く世界で、それはケインズもよく知っていたのですけれども、政治まで利己心で動くとは考えていなかったのであります。ケインズは、経済をモラリストの眼で見ながら、政治を啓蒙思想家の眼で見ていることになるのでしょうか。

第二——資本主義という言葉は、社会主義者が作った言葉で、社会主義者が現れて、現存の経済秩序を資本主義と呼ぶようになり、同時に、資本主義を批判し、社会主義の理想を説いたのであります。資本主義という言葉の定義は簡単ではありませんが、資本主義の生命である交換経済は長い歴史のあるものであります。物と物とを交換する、物と貨幣とを交換するというのは、遠い昔から行われて来たことで、交換が行われる場所が市場であります。なぜ交換が行われるのか。それは、お互いに得だからであります。それが利己心を満足させるからであります。Aが品物を持ち、Bがお金を持っているとして、AがBに品物を渡して、Bからお金を受取る場合、普通、品物を持つAは、これによって若干の利益を得ます。その品物を手許に持っている時の効用（幸福）より、それを売った時の効用の方が大きいから売るのであります。買う方も、千円なら千円というお金を持っている時の効用より大きい効用が得られると思うので、その品物を買うのです。経済学では、消費者が交換によって得る利益を「消費者余剰」と名づけているようであります。そんな難しい言葉を使う必要もないのでしょくに。(笑)

とにかく、交換にしろ、市場にしろ、モラリストが描いた利己心によって成り立っているもので、その市場が万能でなかったから、ケインズの登場が必要になったには違いありませんが、同時に、人間本来の利己心の活動というのが資本主義の生命力なのであります。

これに反して、ソ連を初めとする社会主義諸国は、原則上、市場というものを禁止しております。利己心のない人間、啓蒙思想家の考えたような人間を前提しているのでしょうか、交換や市場がないために、経済活動に利己心の働かぬ余地がないのです。他にも様々な理由があるでしょうけれども、社会主義諸国の経済不振の大きな原因は、利己心の抑圧にあるのではないかと思います。その証拠には、社会主義諸国にも集団農場のほかに猫額大の自留地があって、そこは、農民が自由に種子を蒔き、自由に収穫し、自由に売ることが出来る、つまり、利己心の活動し得る唯一の土地で、ソ連では、この自留地が全農地の1%とかなのに、そこの生産物——品目にもよりますが——



が全農産物の30%とかを占めているという話があります。

第三——経済的自由がなければ、政治的自由はない、これは常識であります。社会主義国家のように、資源も人間も国家の独占的所有及び処分に委ねられて、市物のないところには、政治的自由がある筈はありません。しかし、政治的自由があるところには、政治の市場があります。そして、そこに登場する人物は、ケインズが考えたような品性高潔な人間ではなく、経済の市場と同じように、利己的な人間ということになりますと、深刻な危機が訪れざるを得ません。

有権者は利己的な要求を次々に出して来ます。それに満足を与えることを約束しないと、政治家は政治家でいらなくなります。言い換えれば、有権者も利己的に動き、政治家も利己的に動いて、天下国家の問題の影が薄くなり、福祉サービスのために財政の赤字が大きくなります。それが、最近のケインズ批判の一つの理由だと思います。先日、ケインズに関する書物を読んでおりましたら、「現代社会は、封建制度の道徳的遺産の上に築かれている」という言葉に出会いました。なるほど、と思いました。みなさんの中にも、お読みになった方が一人か二人はいらっしゃると存じますが、私は、E・H・カーの『新しい社会』（岩波新書、昭和28年）という書物を訳したことがございます。現在は何十版でしょうか、大変に広く読まれております。これは、カーという人の頭脳の明晰さを証明するような恐ろしく明快な本なのですが、ただ、第三章は例外でございます。「経済の鞭から福祉国家へ」という章であります。

この第三章では、E・H・カーは、見苦しい堂々めぐりの議論をしているのです。ケインズの唱えるような方向で、政府が経済に介入し、好景気を保ち、所得の再分配によって、福祉サービスを進め、福祉国家が出来上がった場合、一体、何が人間を働かせるのかということを論じて、そして、どうしても、結論が出ないのです。堂々めぐりなのです。

私の流儀で申しますと、人間というのは生物でございますので、餓死する恐怖を持ち続けて来たのだと思うのです。餓死する危険というのは、人類が

地球上に現れた時からあったと思います。この餓死への恐怖のために、人間は、一方で、利己心に磨きがかけられると同時に、他方では、凶らずも、幾つかの美德——勤勉、礼儀、節約……——を身につけるに至ったのであります。

しかし、福祉国家というものが実現して、人間が餓死の危険から免れるというのは、何千年、何万年に亘って人間を内部から脅かして来た恐怖が消えるということでもあります。伝統的美徳の生物的基礎が失われるということでもあります。その時、何が人間を働かせるか、という問題の前で、E・H・カーは、終に解答が見出せないのであります。

どなたもお気づきのことかと存じますが、福祉国家、福祉社会、福祉政策という種類の言葉が頻繁に用いられるようになりましてから、福祉という言葉の意味が急に変化して参りました。もともと、「福祉」は「幸福」と同じ意味の言葉で、それは、古来、人間の能力、努力、運命、この三者によって獲得されて来たものであります。ところが、国家が福祉サービスを行うことになりましてからは、幸福と福祉という同じ意味の言葉の間に分裂が起って来ました。能力、努力、運命の中の第三の運命の部分で恵まれない人々がいる場合、国家が不足分を補うというところから出て来たのが、福祉サービスであります。そうなりますと、「幸福」とは別に、「福祉」は、中央の政府や地方の自治体から貰うもの、無料で受取るものという意味を帯びるようになりました。それだけでなく、運命の部分だけサービスして貰うのではなく、自分の能力や努力による部分まで運命の方へ繰り入れて、政府の福祉サービスで面倒を見て貰いたくなる傾向が生れて来ます。やはり、人間は、モラリストの描いたようなものかと考えられます。

現代の社会学では、レシプロシティ (reciprocity) という問題が議論されております。色々な学者が色々な角度から議論しております。相互作用とか、相互関係とかいう言葉ですが、多くの場合、「互惠性」と訳されております。先程の交換の現象も含めまして、人間と人間との間に相互的な関係がある、そして、その相互的な関係が双方にとって快いものである、これが、

社会生活というものの基礎であります。ところが、福祉サービスの発達には、互惠性を破壊する面があるのであります。AからBへ所得が移転する場合、Aが自分のお金をBに与えれば、Bは、「こんなに戴いて申訳ありません。本当に助かります」と言うでしょう。そう言われると、Aも、何だか少し備かったような気がして——「消費者余剰」でしょうか(笑)——「まあ、そんなにおっしゃらずに受取っておいて下さいよ」ということで、人間社会の土台がジッカリと堅まるのであります。

福祉サービスが或る程度まで発達致しますと、所得の移転が匿名化されてしまいます。匿名化は、一つの進歩なのでありましようが、Aとしての私は、所得の一部を税金として吸い上げられ、そのお金が、中央地方の政府から、この会場にいらっしゃる——ではありません(笑)——この会場の外にいらっしゃるどなたか(B)へ渡されることとなります。それでBが大いに助かると致しましても、Bが私に礼を言うことはありません。私も、それがBに渡ったことは知りません。Aとしての私は政府に対して義務を果し、Bは権利として政府からサービスを受ける。福祉サービスの発展には、互惠性の原理の崩壊という危険が伴っているのであります。

第四——もう一遍、私は、啓蒙思想について申上げる必要があるかと存じます。啓蒙思想がフランス革命を生んだものではありませんが、起ってしまったフランス革命に、それが名分を与えた、と私は考えております。思えば、早くから、名分を与えていたわけで、それは、1789年の「人権宣言」(「人及び市民の権利宣言」)に始まるとも考えられます。

第一条に曰く、「人は、自由且つ権利において平等なものとして出生し且つ生存する。……」確かに、これは美しい理想の言葉としては結構であります。しかし、それで現実の政治問題を解決しようとしますと、現実において人間は自由でもなければ平等でもないのですから、混乱が混乱を生んで、どうにもならなくなります。今、その点に深入りするのはやめまして、ただ、右の「人権宣言」がフランス人の作ったオリジナルなものでなく、それから13年前の、アメリカ独立の際の「ヴァージニア権利章典」(1776年)の

模倣であることに触れたいと思います。これによりますと、「第一、すべて人は生来ひとしく自由且つ独立しており、一定の生来の権利を有するものである。」これは、謂わゆる天賦人権説に基づくものでありまして、人間が生れながらにして持っている権利を守るために国家が作られるという考え方であります。

アメリカの場合は、それでよかったですでしょう。何しろ、アメリカというのは、イギリスから独立した人たちが新しく人工的に作った国家なのであります。『人権宣言集』(岩波文庫、高木、末延、宮沢編)の解説によりますと、こういう人権は、国家に先行し、一切の法律に先行するそうであります。アメリカという人工国家なら、それで済みます。しかし、人工国家ではないフランス、既に国家が存在し、既に歴史が存在し、既に闘争が存在しているフランスの現実には、アメリカを真似た「人権宣言」を持ち込んだら、無事に納まるわけはありません。フランス革命が一大悲惨事に発展した罪の一つは、「人権宣言」にあると申しても過言ではありません。

『人権宣言集』には、色々な時代の多くの国々の人権宣言が収められ、また、各国憲法中の人権宣言的部分が収められております。わが日本の「大日本帝国憲法」(1889年)の中の「第二章 臣民権利義務」も載っておりますし、「日本国憲法」の中の「第三章 国民の権利及び義務」も載っております。大変に便利な本であります。

この便利な本を眺めておりますと、色々な感想が浮んで参ります。その一つを申し上げますと、法律家の方々は気楽だということであります。色々な時代の人権宣言を並べていらっしゃるようですが、色々な時代における国家の役割における著しい相違という点は、殆ど関心がないようであります。古い時代の人権宣言の場合には、国家からの自由と申しましようか、経済活動を初めとする諸活動は各人が自由に且つ責任をもって行うから、国家は黙って見ていてくれ、手を出すな、口を出すな、というのが主眼でありました。「夜警国家」という有名な言葉があります通り、国家は、「火の用心」というようなことをやっていたらよい、余計なことはやるな、というのが根本思想でありま

す。軽量国家、最近の流行語を用いますと、「小さい政府」であります。国家が何もやらないのなら、天賦人權でも何でもよいでしょう。

これに反して、現代の国家は、「福祉国家」であります。国家に向って、あれもやれ、これもやれ、と次々に注文をつけて、それで出来上った「重量国家」であります。あれもこれもと国家に面倒を見て貰う場合の人權とは何でしょうか。何事も国家に面倒を見て貰うような権利を、人間は生れながらにして持っているのでしょうか。また、面倒を見て貰っている人間が、自由とか何とかを要求する権利があるのでしょうか。法律家は、その辺のところを深く気にかけておられないようであります。この点は、むしろ、一部の経済学者の方が心配しておりまして、福祉サービスに深入りすれば、自然に、全体主義国家に転化すると申しております。それはその筈で、万事を国家にやらせるようになれば、国家が人と物とを独占的に所有し処分するところへ辿りつき、人間の手には自由や権利はもう残らなくなるのであります。福祉国家の先に待っているのは全体主義国家なのです。それに気がついて、というのが一つの理由で、世界の諸国が「小さい政府」への道を探り始めていると申せましょう。

#### 四

先程、行動主義の話を少し申し上げました。方法上の理由から考えますと、非常に極端な形になったのも止むを得ないかと考えますが、しかし、人間性を掴むための心理学として見ますと、極めて貧しい結果に終わっていると申さねばなりません。

心理学と限らず、学問や思想は、どうしても、一つの極端と他の極端との間を絶えず往復しているような気がします。行動主義という極端な考え方は、実を申しますと、本能論というものがあまり極端な形になったことへの反動として生れたのであります。マルクスの盟友であったエンゲルスは、「ヘーゲルがあんなに極端な観念論を唱えなかったら、自分たちもあんなに極端な唯物論を唱える必要はなかったのだ」(笑)というようなことを述べており

ますが、その情や掬すべきものがあります。

本能論については、これは1908年(明治41年)という年が大切であります。経済学の本を読んでおきますと、「1936年以後」というような記述が出て来ます。それは、ケインズの主著の出版以後という意味であります。心理学でも、時々、「1908年以後」ということが言われます。それは、この1908年という年に、ウィリアム・マクドゥーガルが『社会心理学概論』を出版したからであります。詳しいことは、拙著『社会心理学』(岩波全書、昭和26年)に譲りますが、マクドゥーガルは、人間の行動の根源に幾つかの本能があることを説きました。本能は、万人共通の、遺伝的なものであります。なぜ彼がそれを説いたのかというと、これも、一方、ヘーゲルに対する、他方、ベンサムに対する反動なのであります。ヘーゲルは、客観精神や、世界精神というものを主張致しました。これらのものは、みな超個人的なものでございます。マクドゥーガルは、そういう超個人的な精神を拒否して、精神というか、心というか、それは飽くまでも個人の内部にあると考えました。もう一つ、ベンサムは、功利主義という名で知られております通り、「快」「不快」を道徳的な判断の規準に用いた人であります。それで「快」と「不快」との計算——「幸福計算」——によって人間は行動すると考えました。それをマクドゥーガルは我慢が出来なかったのです。人間は、計算や打算でなく、非合理的なものによって動く、と彼は考えました。本能は、人間を衝き動かす非合理的な力であります。ヘーゲル及びベンサムを敵として、マクドゥーガルは、個人の内部にある本能が個人の行動を決定し、そこから色々な社会現象が生み出されるという説を樹てたのであります。

例えば、人間には闘争本能というものがあって、そのために戦争が起る。人間は、好奇心という本能があるので、そこから学問が生れる。まあ、この辺までは無難なのですが、研究者は、次から次へと、新しい本能を持ち出すようになって、最後には、統計的な処理をしなければならぬくらい、多数の本能が出来てしまいました。それは、便利だからです。戦争を闘争本能で説明するとして、それなら、戦争が終って平和になるのはなぜか、という問

題が出て来ます。その時は、平和本能というものを作ればよいのです。(笑)なぜ人間は散歩するのか。散歩本能。その人間がなぜ帰宅するのか。帰宅本能(笑)という調子で、問題が出るたびに、それに見合った本能を作ればよいのであります。こういう議論が20年間も続いたのです。しかし、便利なものには必ず怪しいところがあるもので、そもそも、本能というのは、観察出来ないのです。観察出来るのは、戦争であり、平和であり、学問であり、散歩であり、帰宅……でありまして、それぞれに対応する本能の方は観察することが出来ない。出来ないから、幾らでも殖やせるのですが、同時に、観察出来ないものは学問の対象にならない。それに気づいたところから、行動主義への運動が、それが極端なところまで行く運動が始まったと言えるのでございましょう。

さて、この行動主義は、心理学では大変に貧しい成果しか生まなかつたと思いますが、これを道徳の問題に移して考えた場合、私は、やはり、観察可能な行為を道徳の根本に据えるべきではないかと思っております。言い換えますと、道徳の問題は、先ず、魂、心、精神、良心などの問題ではなく、行為の規則のシステムの問題として考えるべきであるということであり、或る程度まで私と同じように考えているのが、有名な社会学者のデュールケムであります。——「行為規則のシステム」については、この次に参りました時に詳しく申し上げたいと思っております。

御承知のように、東西を問わず、道徳と言えば、魂、心、精神、良心などという内面的な事柄を中心とする学説がございましたが、それが生れた時期には、人間の行為の形式がかなり整っていたのだと思うのです。現在の日本のように、また、他の先進諸国に見られるように、行為の形式が著しく崩れている時代では、内面的な事柄よりも外面的な事柄をもっと重視すべきであると私は考えるのです。

第一に、行為の形式は、学ぶことが出来るもの、教えることが出来るものであります。何事につけても、形から入る、外面的な形式から入るというのが、私ども弱い人間にとっては普通の道であります。お茶の精神とは何かと

というようなことが問題になりますが、また、『茶の本』という有名な書物も世に行われておりますが、しかし、千万言を費しても、お茶の精神を学ぶこと、教えることは出来ません。出来るのは、お作法に従って、お茶を点てるということだけです。先生の行為の真似をするということ、先生が作法を教えるということだけです。そういう外面的な行為の繰返しを通して、私たちはお茶の精神に近づく、それが判り始めるのであります。また、俳諧の精神とは何かということが言われますが、千万言を費しても、判らないし、伝えようもありません。「わび」や「さび」と言ってみたとところで、どうにもなりません。何回となく、一所懸命に十七文字を並べながら、先人の残した遺産に学んで行くほかはありません。天才は別として、私ども平凡な人間は、形式から入って行くよりほかに道はないと思うのであります。

第二に、形式は学べる、教えられるというのは、それが観察可能だからであります。酒を少し飲んで、忽ち酔っぱらって周囲の人間に迷惑をかける男がよくいるものであります。そういう時に、長年連れ添った細君は、「どうか、悪く思わないで下さい。この人は根は善い人なんですから」と弁解するものであります。まあ、何十年も連れ添っていれば、そう思わざるを得ないかも知れませんが(笑)、また、細君には見えるのかも知れませんが、不幸にして、私たちにとっては、その「根」なるものは観察不可能なのであります。ただ、観察可能なのは、少量の酒に酔って、周囲に迷惑をかけている男の行為だけなのです。私たちにとっては、仮に「根」があるとしても、この行為から推察されるような、また、この行為を説明するに足るような「根」、即ち、悪い「根」であるでございましょう。

つまり、Aという観察可能な行為をする人間の内部には、aという観察不可能な心があるのではないかと、そう私たちは仮定する以外に方法はないのです。「こんなに長い間、そこに立ってお話しになって、さぞお疲れでしょう」と——どなたも言って下さいませんが(笑)——言って下さる(A)方がおられれば、ああ、この方の内部には優しい心(a)があるらしい、と私は推測乃至仮定することが出来るわけです。誰かがBという観察可能な行為を

すれば、その人の内部にはbという観察不可能な心があるであろうと推測し仮定することが出来ます。

以前から、私は、表現されないものは存在しないという考え方を持っています。表現されないものは、存在しないものである、表現された時に初めて存在するという考え方であります。

同じく以前から、私は、「偽善」ということを勧めて来た人間であります。一般に、偽善というのは、非常に評判の悪いもので、表面は立派に見える行為でありながら、その背後に醜い心が潜んでいる、そういう行為を指しているものと解されておりす。そうかも知れません。しかし、私が大切だと思いますのは、「立派な行為」は、観察可能であり、しかも、それによって、他の人々に慰めを与える、或いは、他の人々を救う、少なくとも、他の人々に迷惑をかけないという点であります。人間というのは、大体、モラリストの描いたような側面が強いのですから、本来、「偽善」としてでなければ「善」を行うことが出来ないと言うべきでしょう。もう一つ、大切なことは、「醜い心」は観察不可能なものであるという点であります。それは、表現されて初めて存在が明らかになるのであります。表現は行為によってしか行われません。

「醜い心」が悪い行為として表現されれば、それはもう偽善としての資格を失ってしまいます。逆に、それが悪い行為としてでなく、善い行為の假面を被っております間は、「醜い心」は存在しないもので、存在するのは善い行為だけになります。もし「醜い心」が悪い行為として表現されることなく、善い行為の假面を被って、それで一生を通す人間があるならば、彼は申分ない善人でありす。君子でありす。聖人でありす。

いいえ、私は冗談を申し上げているのではございません。「形から入る」というのが、茶道や俳諧ばかりでなく、道徳においても、私たち凡人に開かれた唯一の道なのであります。形式から入って内容に至る、いや、形式によって内容が生れると言うべきであります。私が或る行為を行えば、それは他人にとって観察可能なものでありますから、他人は私の行為に対して何らかのサンクションを与えるでしょう。サンクションという言葉は、「制裁」とい

う否定的な訳語を与えられることが多いのですが、「賞讃」というような肯定的な意味もあるのです。賞罰という言葉であります。しかし、面倒ですから、サンクションをやめて、評価という言葉を使うことにしましょう。評価は、多くの場合、これも観察可能なものであり、また、観察可能なものであるべきであります。私が或る善い行為を行って、それが他人によって賞讃される、感謝されると致しますと、賞讃や感謝の言葉は、当然、私にとって快いものでありますから、私の内部には、今後も同じように善い行為をしようという傾向が自ら生れて参ります。それが普通の人間であります。意地悪く言えば、賞讃や感謝の言葉という快いものが欲しいから、とも申せましょう。それで結構なのです。とにかく、善い行為をしようという傾向が生れて来れば、その傾向を良心と呼んでもよいし、善意と呼んでもよいでしょう。「美しい魂」と呼んでもよいでしょう。観察可能な形式から、観察不可能な内容が次第に生れて来るのであります。形式が内容を作るのです。

私の話を奇妙にお感じになる方が多いかと存じますが、その方々は、あの啓蒙思想の影響を受けて、本来、人間は善なるものと信じていらっしゃるのです。それに対して、私は、むしろ、モラリストの人間観を奉じて、人間の弱さ、醜さ、卑しさ、そういうものを前提として、行為規則のシステムとしての道徳を考えて行きたいのです。汝、偽善者たれ、と私は呼びたいのです。どうも、モラロジーの精神に反するような——いいえ、恐らく、そうではないと思います（笑）——ことを申し上げてしまいました。私の話が何かの御参考になれば、甚だ仕合せであります。（拍手）

（これは清水幾太郎先生が1980年11月26日にモラロジー研究所において、同研究所研究部主催の公開研究会で行なわれた講演に、手を加えていただいたものです。）